何よりも

牛尾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
何よりも

【Ｎコード】
Ｎ５８１８Ｓ

【作者名】
牛尾

【あらすじ】
私にとってはたった一日。それだけだったのに、すべてが変わってしまった。事故に巻き込まれて、一晩無断外泊をした。次の日家に帰ると知らない人が家に住んでいて、弟だと名乗る。信じられないけれど、突きつけられる事実はすべて彼が本当のことを言っていると証明していた。

坂の上から見る景色

いつもの坂道を、駆け抜ける。
自分の息を吐く音が、ひどく耳障りだ。制服のスカートが翻り、太ももに張り付く。それでも足を止めることはしなかった。
頂点まで行けば、いつもの景色が私を迎えてくれる。それを確認したくて、ただひたすら駆けた。
坂道の頂点。ようやくたどり着いたそこから見える景色は――――――――

「うそ……でしょ……？」
待ちわびた景色はそこに確かにあった。通いなれた校舎、部活に勤しむ声が響き渡る校庭。下校していく生徒たち。私の日常。
一つ違うのは、彼らの制服だ。
私が来ているのは灰色に白いラインが2本入ったセーラーカラーのワンピース。この制服が着たくて受験勉強を必死に頑張った記憶はまだ新しい。
彼らが着ているのは、チェックのスカートやズボンに半袖のワイシャツ、縞々模様のネクタイ。
私はその制服を見たことがあった。
ワンピース型の制服は洗濯が不便であることもあって、変わることが決まっていた。私はこの制服を着る最後の学年の生徒だったのだ。
あの制服は、来年から採用されるはずのもの。
「こんなことってないよ、そんなわけないじゃない。だって昨日まで私は！」
「姉ちゃん、待って」
振り向くとそこには、見上げなくては顔が見えないぐらい背の高い男性が立っていた。
「私はあなたなんて知らない！」
「知ってるだろ。そりゃ、驚くだろうけど、いやこっちも驚いてる

んだけど、でも姉ちゃんはどう見ても……、姉ちゃんのままだし」
私を姉ちゃんと呼ぶこの男を私は知らない。名前は聞いた。でも知らない。
彼は私をじっと私を見下ろす。その顔は気まずそうで、でも嬉しそうな表情だった。
「だって、私の弟の智はこんなんじゃない！　私と同じくらいの身長の、野球ばっかりやっていて全然気が利かない子で、いつもお腹すいたーって帰ってきて」
最後まで言う前に、男は私を引き寄せ、肩に腕を回して抱きしめた。視界いっぱいに彼が着ているTシャツのブルーが広がる。
「俺は、腹空かせて帰ると姉ちゃんが飯作って待っててくれて、それが当然だと思ってたバカな弟の智だよ。姉ちゃんがいなくなって気付いた、俺や海晴がいつもどれだけ姉ちゃんに面倒かけてたか」
その声は確かに、声変わりして低くなった智の声とそっくりで、否応なしに何が真実なのかを私に伝えてくる。それでも認めることなんてできっこない。
「なんで、どうして？　どうして、そんなになっちゃったの？　わけがわからないよ。一日家に帰らなかっただけなのに、なんで……」
私を抱きしめている腕の力が強くなった。
「姉ちゃんは、8年間行方不明だったんだ」
そんなこと、ありえない。
そう思うのに、この坂から見える景色は昨日と同じようで全く違う。
「また会えて……、すげえ嬉しい」
その声は震えていて、きっと彼は涙を流していた。

坂の上から見る景色（後書き）

お読み頂き誠にありがとうございます。
文章の上達を目標としていますので、分かりにくい表現や誤字脱字などありましたら是非ご指摘ください。
感想もお待ちしております。

更新は不定期。
仕事がら執筆速度はとても遅いです。
完結まで頑張って持っていきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

あの日

その日は朝起きて、学校に行って、友達とおしゃべりして。何も変わったことなんてなかったし、いつも通りのたいして面白くもない一日だった。あえて言うならば、抜き打ちで数学のテストがあったぐらい。それも一か月に一度は必ずあることで、特別なことでもなんでもなかった。

「今日も暑いねー」

「ねー…」

「アイスが食べたいねー」

「ねー…」

教室の窓側の席。ここは風が入ってきて気持ちがいい。その代り日差しがとても強く、カーテンを閉めていても夏が来ていることを感じさせる。そんな場所で彼はずっと本を読んでいた。

ここであえて本なんて読まなくても涼しい場所があるのにと一度聞いたことがある。日があたって気持ちがいいから、と返された。本を読む彼の前の席に座り、聞いてもらえているのかもわからない会話の続きをする。私はそんな時間が好きだ。

「もうすぐ夏休みだよー」

「ねー」

「やっぱり聞いてないじゃん！」

語尾を伸ばしていれば引っかかるかと思ったが、まんまと引っかかった。

「いや、聞いてるよ。聞いてる。俺の可愛い彼女さんの言うことですから、ちゃんと聞いてるよ」

「そういうときばっか彼女とか言ってさ、都合いいよね！　もう！」

そうは言いつつも、自分の顔に熱が集まるのがわかった。高校に入って三か月。付き合い始めて二週間。中学からの同級生の彼、三木大地は私の彼氏。だけど、まだなれない。

「いや、聞いてたよ。夏休みだって言ってた」
「……なんでわかるの？　聞いてなかったくせに」
彼は本から顔をあげて、得意そうに笑った。
「俺の勘は当たるからな」
「それってやっぱり聞いてなかったってことでしょう？」
じっと睨むと彼は視線を逸らした。そのまま時計とちらりと見て口を開く。
「あー、バイトの時間なんじゃない？」
「そうやって話をそらしてさ。本読んでばっかりでつまんないよ」
「何？　さみしかった？」
にやにやと笑いながら人をからかうように冗談めかしてそんなことを言う。いじわるのつもりなのかもしれない。いつも無口で静かな性格なのに、私にだけこうしていろいろな表情を見せてくれるから、いつも私だけ慌てたり照れたりどきどきしたり。
たまには復讐したい気持ちになった。
「うん、寂しかった」
「……な」
「たまには本じゃなくて私のこと見てよ、っていつも思ってるんだよ？」
彼の顔は真っ赤に染まる。
でも、それ以上にきっと私の顔は真っ赤だと思う。
「じゃあね、また明日！」
自分の机に置いてあったかばんを持って、教室から飛び出した。顔が熱い。
復讐のつもりが、自分のほうが被害が甚大かもしれない。でも、それも嬉しい。
きっと今年の夏休みは楽しいことがいっぱいだ。大地といっしょに居られれば、それだけで。
いっぱい遊ぶためにも頑張って働かなければ。
急いでアルバイト先の神社に向かう。いつもならバイトの日は自転

車だが、今日は弟の智の自転車がパンクしたせいで乗って行かれてしまった。智は部活の朝練で早いから勝手に。バイト先までそんなに距離があるわけではないし、帰る時間がそんなに遅いわけでもないから安全だし、別に良いのだけど勝手に乗って行かれたのには少し腹が立つ。

「今日の夕飯はピーマン料理にしよう」

一人そう呟いた。智はピーマンが食べれない。下の弟の海晴は好き嫌いなくなんでも食べるのに情けない。

バイトの帰りにスーパーに寄って、智が部活から帰ってくる前におかずを三品、味噌汁を作る。ご飯食べて、お風呂に入って、宿題をして。

それで、全部終わったら大地にメールしてみようかな。……ううん、今日は電話してみよう。

少し恥ずかしいけど、言った言葉に嘘はない。でも、読書の邪魔をしたいわけじゃないから、それは伝えておきたいと思う。

本を読んでいる姿を見ているだけでも、近くにいていいと思われていることが嬉しくて幸せだけど、私のことも知りたいって思ってほしいと最近思うようになった。

付き合う前なら絶対にそんなふうには思わなかった。

大地が私のことを多少なりとも好きだって言ってくれているだけでどうしようもないくらい嬉しい。でももっと好きになってほしい。

私が大地を思うのと同じくらいに。

「わがままだよねぇ……」

自分の欲の深さに呆れるというか、なんというか。

勝手に好きになって、片思いしている間は話ができただけでも一日笑顔で過ごせるくらいだったのに、今はそれじゃ満足できないなんて。

夏休みは学校がないから毎日会えない。でもその代わりどこかに一緒に出かけようって誘ってみるつもりだ。

神社の境内に続く林の階段を登っていく。今朝少し降った雨のせい

で少し地面がぬかるんでいた。ローファーの裏に泥が付く感触が気持ち悪い。
自転車があれば、正面のきれいに舗装された道を行くけど、かなり遠回りになるから歩いて行くときは裏道であるこの道を通る。でも、今日はやめればよかった。
「うわぁ……ってええ！？」
足を持ち上げて靴の裏を確認しようとした瞬間、足が滑った。
体が傾く。慌てて体を支えようと手を伸ばしたが、何も掴むことはできなかった。
歩いていた道の左側に倒れ込む。
やばいと思った瞬間、後頭部に強い衝撃。
そこで私の記憶は途切れた。

瞼のうらが赤い。
ゆっくり目を開ける。
草と土と葉にまみれて倒れていた。
……ここは、神社の裏の林？
はっとして、遠くに投げ出されていたカバンの中の携帯電話で時間を確認する。
１５時３０分。
私が学校を出たのは１６時ちょうどだった。
そんなまさか、一日ここで寝ていて誰にも気づかれなかったのだろうか。バイト先の奥さんだってこの道を通るはずだし、そんなことありえない。
でも確かに日の傾きも、夕方になりつつあることを示していた。
一日こんなところで倒れていたせいか、軋む体をなんとか動かして、どうしようもないので一度家に帰る。

学校もサボったということだろう。一晩帰らなかったのだからきっと家族も心配している。
怒られることを思うと気が重い。
病院もいかなくてはいけない。今はどうもしていないけど頭を強打したのは確かだから、検査をしたほうがいいだろう。
色んなことを考えながらとぼとぼと家まで歩いた。
なんだか違和感がある。でも疲れているし、あまり気にしなかった。
家には誰もいないとわかっていたから、カバンから鍵を取り出し、玄関を開けて自分の部屋に向かった。
階段を上り、右側の部屋の扉を開ける。
中を見て、閉める。
ここは階段を登って右の部屋だともう一度確認。確かにここは私の部屋だ。
もう一度開ける。
中は知っている間取りだが、置いてある家具や物は知らないものだった。
奥に置かれたベッドではパンツだけという格好で男が寝ている。
もしかして、家間違えた？
鍵を開けて入ったのにそれはない。そう思いつつ一度玄関まで戻り、表札を確かめた。うん、うちだ。
また階段を登って部屋の扉を開ける。
「うわぁっ」
開けた瞬間男が目の前に立っていた。眉間にシワを寄せてこちらを睨んでいる。
「誰だ……？」
低い声でそう言われて、お前こそ誰だと言いたいところを抑えた。
男は眠そうにあくびをすると、目を擦り、もう一度こちらを見て、よっぽど驚いたのだろう、一瞬飛び上がった。
「……、ね、姉ちゃん！？」
「はい？」

意味がわからない。いや、この状況も意味がわからない。この男だけではなくて、なんでうちに帰ってきたのに私の部屋がなくなっていて、こんな人が出てくるのかも。
「もしかしてうちとそっくりな、全く違うお宅？　でも鍵は合ったし」
「うえっ！？　姉ちゃんだ、姉ちゃん、変わってないけど姉ちゃんだ」
私がぶつぶつ言う横で、男の人はぎゃあぎゃあと騒ぐ。
「あの、ここは柳町３丁目６－２９の相堂家ではないのでしょうか」
「当然。姉ちゃん今までどこに行ってたんだよ。母さんに電話しなきゃ、父さんにも。海晴は……いいか別に」
「なんであなたうちの弟を知ってるの？」
私の言葉にかれは驚いた顔をした。さっきから人を見て驚くとはどういうことだろう。
「なんで姉ちゃん海晴のことは覚えてて俺のことは忘れてるんだ！」
「いや、あの、誰ですか。そもそもうちだと思って入ってきて、私の部屋だと思って開けたらあなたがいたから……、ここってうちじゃないんだよね？」
最後のは自分で自分に確認するようなものだったけど、目の前の彼から返事がきた。
「ここは間違いなく姉ちゃんの家だよ。俺は智。８年ぶり、姉ちゃん」

あの日（後書き）

本当に文章力ないなあと思う今日このごろ。
この辺はざっくりいきます。
本当は省略して書くつもりもあまりなかった部分。

昨日の明日

そんなぶっ飛んだ返事が来ると思っていなかった。
「なんで弟の名前を知ってるの？　本当にあなた誰？　そしてここはどこ？」
怪しい男をじろじろと観察しながらそう言うと、男はちょっと待っててと言って部屋へ戻っていった。そしてすぐに戻ってくる。
「これ見て。俺が野球の大会でＭＶＰをもらった時に記念で撮ってくれた写真。応援に来てた姉ちゃんと海晴が写ってる。ほら」
差し出されたのは先月撮った写真だった。アクリルの写真立てに入っているが、色は焼けて薄くなっている。
「……確かに、そういうこともあったけど。なんでそれをあなたが知っているの？　それに、なんかこの写真、すごく日に焼けてるみたい」
写真をひっくり返すと日付が入っていた。先月の２２日。
「そりゃ焼けるよ。ずっと飾ってたから。これ以降の姉ちゃんの写真が見つからなくて、もっと写真撮っておけばよかったって何度も思った。姉ちゃんが撮ってくれた俺と海晴の写真はいっぱいあったけど、姉ちゃんの写真って少なくて」
その後も怪しい男は喋り続けたけど、その言葉はあまり理解できなかった。
だって、姉ちゃんが姉ちゃんがって言うけど、この人のお姉さんのことなんて私は知らないから、聞いてもわからない。この人がお姉さんをとても大事に思っていることは分かったけど。
「あの、私家に帰るので。勝手にお邪魔してすみませんでした」
やっぱり、家を間違えたんだ。だってこの人のことを私は知らないし、この家の内装だって、とても似ているけど、うちと違う。雰囲気も臭いも同じだけど、どこか違う。
玄関に向かう私を引き止めるように、彼は私の腕をつかんだ。

「やっと帰って来たっていうのにどこ行くんだよ」
「……それは人違いだと思いますよ？」
「違わない。だってこんなに全く同じ人がいるわけがない。あんなに探し回ったのに、そんな人いなかったんだから。姉ちゃんと似た人が家を間違えて上がり込んだなんてことありえない。鍵まで開けて入って来て」
私はこの人を知らないのに、この人は私を探していたお姉さんだと言う。
自分は智だと言って。
そんなこと信じられた話じゃないけど、確かにこの家の鍵を私は持っていた。
「もし、あなたが本当に智だとして、一日でどうしてそんなに大きくなったって言うの？　おかしいじゃない。なんなの、これ。ドッキリ？」
「姉ちゃんにとっては、昨日のこと？」
彼は私の姿を、爪先から頭のてっぺんまで見渡して、顔を歪ませた。
「泥だらけだけど、何も変わってないもんな……。あの日出かけたまま。高校の制服、学校指定の学生カバン。肩までの髪。どこも変わってない……」
彼はそう言いながら私の手を引いて、階段を降り始めた。
「ちょっと、手を離して」
そのまま歩き続けるせいで、転びそうになるが、自分の家と同じ間取り同じ階段。慣れているからか、転ぶまでには至らなかった。
「8年も経ってるのに……なんで」
「ねえ離してよ」
「これ見て」
リビングの扉を開けると、中はやっぱり見たことがある雰囲気だった。でもカーテンの柄が違う。クッションの色が違う。
彼が見ろと突きつけてきたのは、リビングのマガジンラックに刺さっていた新聞だった。

「何で……、何を見ろっていうの……」
とりあえず受け取って、広げてみる。普段から新聞なんてあまり読まないから、ニュースを読んでも理解が出来ない。一体何を読めと言うのか。
「ここ、見て。今日の日付」
「今日は……、7月13日……20××年？」
「そう20××年。姉ちゃんが居なくなってから、8年が経ってるんだ」
新聞の日付は、確かに私が知っている年に八を足した数字。
「やっぱり、ドッキリ？　手の込んだ小道具だね」
「違う！　じゃあこっち」
彼は、今度はテレビの電源を入れた。見たこともない薄くて高そうなテレビの電源が入る。うちのテレビよりとても映りが綺麗なことに驚いていると、ニュースにチャンネルを変えた彼はじっと画面を見つめていた。
四角い画面の中のアナウンサーが今年の猛暑について話している。
『……昨年と比べ、一度～二度高く……』
ぱっと切り替わり、折れ線グラフが表示された。今年の気温と例年の気温を比べるお決まりのグラフだ。最後の、今年を示す場所には未来の数字。
「ほら、今年は20××年。姉ちゃんが居なくなってから8年経った。だから、俺は、今年で二十二になったよ。そりゃでかくもなる。野球は高校で県大会まで行ったけど、それでやめた。大学も出て、今は院生。そうだ……これ」
そっと手渡されたのは、運転免許証だった。
名前の欄には『相堂　智』の文字。生年月日も、全てあっている。
免許証の、少し緊張しているのか、硬い表情の写真は、確かに私の知っている智と少し似ている。
免許証と目の前の彼を見比べて、確かに彼であると、思った。
「本当に、智？」

「だから、そう言ってるじゃん」
「だって……、信じられないよ。確かに似てるけど、やっぱりドッキリで、実はただの似ている人とか……」
言いながら、そんなことをして何になるのか、と思い始めていた。
私にドッキリを仕掛ける理由なんてない。
でも、何がなんだかさっぱりわからないのだ。彼が言っていることの意味はわかる。でも、頭が追いついていかない。
「わけわかんない。……8年？　だって私は昨日のままだし、そんなの！」
目の前の自称弟しか話をしていないし、新聞やテレビなんてもので証明されても、普段情報源として使用してはいるものの、実感がわかない。
大地に会いたい。
ふと、そう思った。
「どこ行くの！？」
彼の声が聞こえたけれど無視をして、私は靴を履いて何も持たず、家を飛び出した。
通い慣れた道をひたすら走る。
知っている街並みなのに、見たことのない表札や、車や、犬、新しい家。いつも友達と寄り道していた公園の、塗り直されたばかりだったベンチは、木のものからパイプのものになっている。交差点の白線は、シマシマの部分だけ。そういうふとした違いに、違和感を覚えながら、それでも学校まで行けば、これはただの悪い夢で、大地に会えると、そう信じていた。
いつもの教室で、いつもどおり、大地と、友だちと話をして、今日学校をサボったことでからかわれて、また明日、っていつも通りの挨拶をして、また家に帰れると。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5818s/

何よりも

2011年12月10日02時47分発行